

## 展示品一覧

前回の展示に引き続いて奥州街道図が3舗展示されている。右の『日本図』（カナ書特別小図・東日本）の赤枠がその範囲である。第一次測量の往復、第二次測量の復路、第三次測量の往路の成果である。

### ○ 大図49（奥州街道：福島県福島市～矢吹町） 「奥州街道図第五（自矢吹ノ至清水町）」

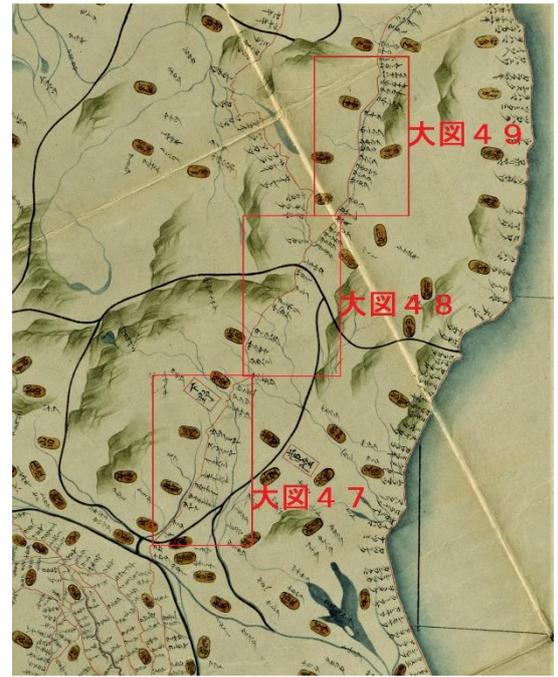
国宝：地図・絵図類 番号49、縮尺36,000分の1

「自矢吹 北四尺九寸四分七厘 至清水町 東一尺〇八分六厘」と地図上の寸法が墨書されている。奥州街道の大図はどれも単調な画面であるが、二本松には城郭が描かれておりアクセントになっている。この大図の範囲は次の日程で測量した区間である。

第1次測量往路の寛政12年閏4月24日～4月25日  
復路の同年10月12日～14日

第2次測量復路の享和元年11月27日～29日

次の図は秦檜麻呂（村上嶋之丞）の「大日本國東山道陸奥州驛路圖」という街道図から二本松付近である。序文には寛政12年春正月とあり、忠敬はその年の6月1日に蝦夷地の一ノ渡で村上嶋之丞を訪れた。



『日本国』（カナ書特別小図・東日本）に加工  
国会図書館デジタルコレクション



「大日本國東山道陸奥州驛路圖」（一） （国会図書館デジタルコレクション）

## ○ 大図（奥州街道：福島県白河市～栃木県さくら市喜連川）

### 「奥州街道図第四〈自喜連川／至矢吹〉」

国宝：地図・絵図類 番号 48、縮尺 36,000 分の 1

第一次測量往路の寛政 12 年閏 4 月 22 日～24 日、同復路の 10 月 14 日～16 日、第二次測量復路の享和元年 11 月 29 日～12 月 2 日、第三次測量往路の享和 2 年 6 月 18 日～21 日に測量した区間である。

「測量日記」の寛政12年閏4月23日には第 1 次測量の往路、江戸を出立して 5 日目の白河城下の宿での出会いを、次のように記している。

白河に七ツ頃に到着した。宿は因幡屋茂兵衛という。白河城下で予定していた宿は小さくて手狭だったので、宿替えて因幡屋となった。この主人は下総佐原で丸屋伊右衛門の酒蔵を借りて、丸屋清吉という名前で酒造をした人物である。丙午の年に大坂の米相場で大損をして、この白河城下へ来たとのことである。思いがけない出会いに、酒肴をもって饗応を受けたので、女房へ南鐮銀一片を遣した。この主人の生国は近江の国である。

丸屋伊右衛門は享保十一年の佐原村の酒造仲間に伊能三郎右衛門家などとともに名を連ねている。宿の主の因幡屋茂兵衛は「丙午のとし、大阪にて米商に損金をなし」白河城下に来たという。丙午の年は天明 6 年（1786）のことで、天明の大飢饉にともない大阪堂島の米相場が大混乱に陥っていた時期である。忠敬が文化 9 年 10 月 13 日付で柳川から妙薫宛てた手紙によると、忠敬は天明 5 年に米の値上がりを予想して大坂などから米を買入れていたが、予想に反し米価が下落してかなりの含み損になっていた。それでも米を 1 俵も売らずに抱え、運を天に任せていたところ、天明 6 年の秋を迎えると、利根川の大洪水となった。抱えていた米で窮民を救済することができた上、米価が暴騰して利益を確保できたと記している。この時は忠敬自身も「十ヶ年逼塞」を覚悟しただけに、二人の明暗を分けた「丙午のとし」をめぐる様々な思いが去来したことであろう。

## ○ 大図（奥州街道：栃木県さくら市喜連川～茨城県古河市）

### 「奥州街道図第三〈自古賀／至喜連川〉」

国宝：地図・絵図類 番号 47、縮尺 36,000 分の 1

この大図の範囲は第一次測量往路の寛政 12 年閏 4 月 20 日～4 月 22 日、同復路の同年 10 月 17 日～19 日、第二次測量復路の享和元年 12 月 3 日～5 日、第三次測量往路の享和 2 年 6 月 14 日～18 日に測量した区間である。「自古賀 北五尺三寸〇七厘 至喜連川 東二尺六寸五分二厘」と地図上の寸法が墨書されている。日光につながる街道であるだけに、街道の両側に並木が目立つ。

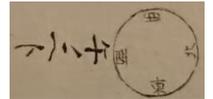
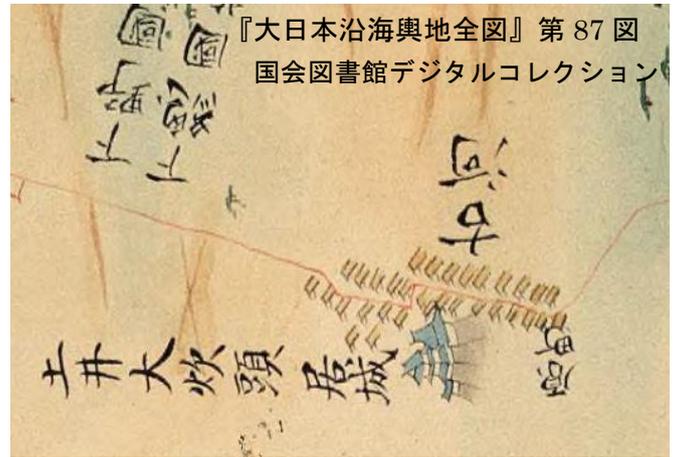


『日光道中間延絵図』巻五之内二から古河宿  
東京国立博物館デジタルコンテンツ

前頁の『日光道中分間延絵図』は東京国立博物館所蔵の重要文化財「五海道其外分間延絵図」の一部で、幕府が東海道、中山道など五街道やその主要な脇街道の実態を把握するために作成したものである。道中奉行の直轄事業として寛政12年から文化3年までを費やして完成したもので、忠敬の全国測量と同時期の実測図である。1,800分の1の縮尺で作製され、問屋、本陣、一里塚、道標、土橋、高札なども描かれており、右の忠敬の大図よりも遙かに情報量が多い。

『日光道中分間延絵図』巻五之内二だけで縦61.6cm×横1379.0cmという長大なもので、街道の屈曲をこの幅に収めるように角度をなだらかに操作し、右図のように正確な方位を傍らに記している。五街道筋の分間図作成時の道中奉行所の御手当金については、『江戸日記』の文化4年3月14日に坂部貞兵衛が調べてもらった書付が記載されている。

「五海道其外分間延絵図」は東京国立博物館HP>コレクション>画像検索>分間延絵図で検索するとデジタルコンテンツにアクセスできる。



## ○ 下図（三重県北部）

### 「自伊勢国三重郡四日市宿至伊勢国度会郡界下図」

国宝：地図・絵図類 番号306、縮尺36,000分の1

「自四日市 至海辺鳥羽鎮界

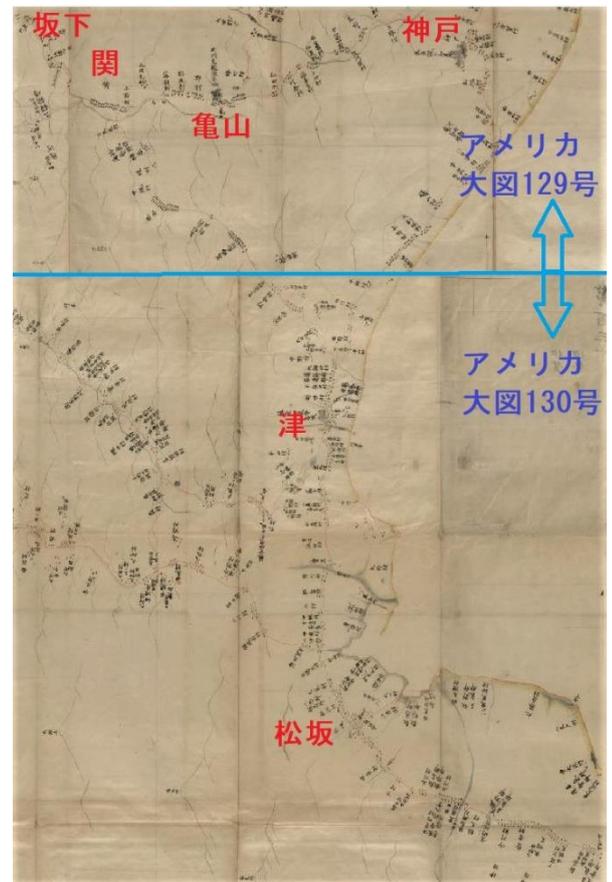
南 四尺一寸五分四厘七毛 東 二寸一分七厘一毛」

「自四日市 至坂下

南 七寸九分九厘 西 二尺二寸九分一厘四毛」と朱書されている。

朱書きで測線の修正がなされていることが目立つ。6個所の山に向かって各地から交合法による方位線が集まっているが、それぞれ決して一点に収斂しているわけではない。測線の修正と関係があるのだろうか。伊能忠敬記念館HPの目録には番号307番に同名の下図があり、縮尺や描画範囲も同一のようである。修正前と修正後の下図ということなのだろうか。

この下図は広域下図であり大図の下図と考えられるが、アメリカ大図の129号と130号にまたがるものであり、最終上呈版とは区割りが異なる。いつ、何のために作製した下図であろうか。



## ○ 授時暦の解説書

### 「元史授時暦経図解」四卷付録一卷

国宝：典籍類 番号66～70

授時暦は元王朝でフビライに仕えた郭守敬らによって作られた暦である。1太陽年を365日とするなどすぐれた暦法として知られ、江戸時代の天文暦学者が盛んに研究し解説書を著した。「元史授時暦経図解」は本編(春、夏、秋、冬)四巻と附録一卷の全五巻からなる。小泉光保の著で元禄十六(1703)年の刊本である。

## ○ 授時暦の解説書

### 「授時暦経診解」

国宝：典籍類 番号71～76

宝永六(1709)年の自序があり、正徳元(1711)年の刊本。著者は亀谷和竹。

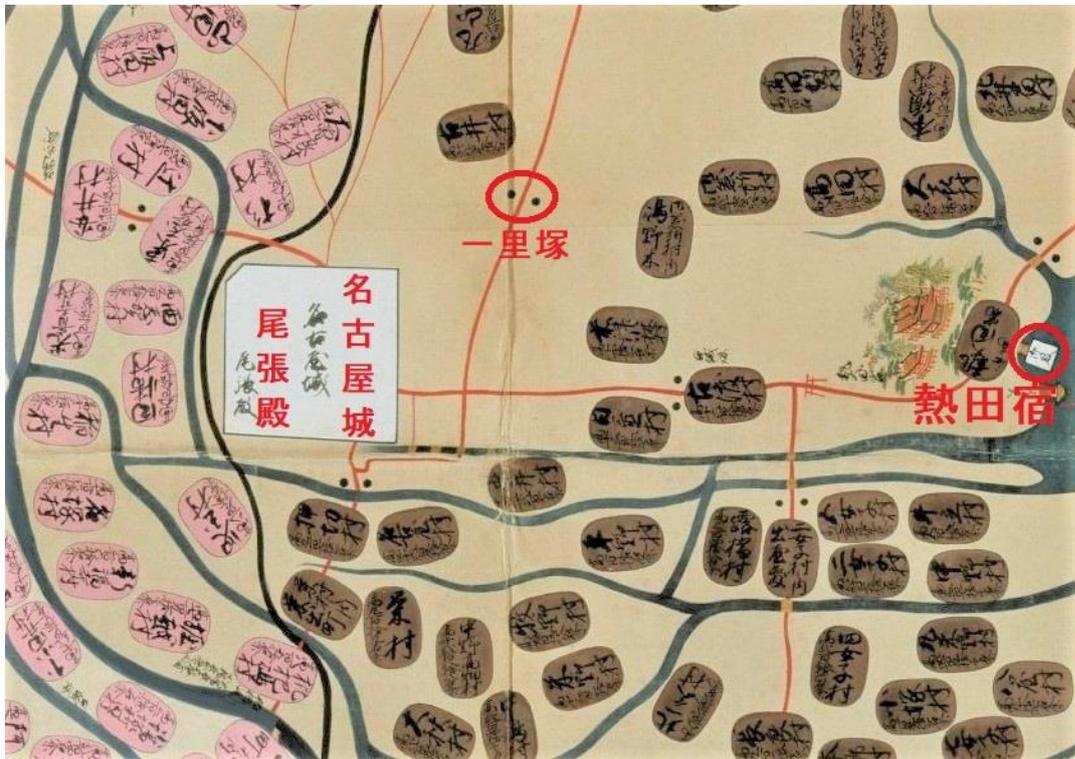
## ○ 参考絵図（尾張国絵図の写し）

### 「尾張国全図」

国宝：典籍類 番号 617

国立公文書館の解説によると、江戸幕府の命で、慶長・正保・元禄・天保の4回、全国規模で国ごとの絵図等が作成された。元禄国絵図は、1里を6寸とする縮尺(約21,600分の1)で、山、川、道路等が描かれ、街道を挟む形で描かれている黒丸は一里塚の表示。郡別に色分けされた楕円形の枠内には村名と石高が、白四角で示された城下町には地名と城主の名前が記されている。各絵図の一隅には、郡ごとの色分け・石高・村数を列挙した凡例が記され、最後に国絵図の作成に関係した勘定奉行・勘定吟味役・目付の氏名が加えられている。国立公文書館の尾張国の元禄国絵図は現存しないため、天保国絵図に加筆して紹介する。

右の図は天保国絵図の名古屋城と熱田宿を中心とする部分である。村名と石高は名古屋郡の村々は茶色の小判型に、春日井郡は薄桃色の小判型に記載されている。重文の原本は東西295cm×南北419cmという巨大なサイズだが、展示されている写図は携帯できる大図程度のサイズに縮図されている。また、小判型に村名を記載しているが石高は省略されている。



天保国絵図 尾張国 (国立公文書館デジタルアーカイブ)

郡ごとに色分けされているが、隣国は色分けしていない。また、凡例も省略されている。熱田宿の伊勢湾上に突き出した「御殿(浜御殿)」は省略されているが、逆に、名古屋城に向かう街道には「日置」「本町通」「京町」「伝馬町」といった国絵図には記載の無い地名が書き込まれている。

文化9年11月8日付で島原城下から忠敬が若年寄堀田撰津守家臣の山田綱次郎に宛てた書状には、御執成しいただいた九州と壱岐・対馬の国絵図の写しがあったので、九州については街道・名所旧跡なども測量できた。帰路の中国筋では長門・周防・安芸・美作の国絵図の写図はあるが、出雲・伯耆・美作がないので拝借・書写について宜しく執成し下さいと記している。また文化10年3月7日付で忠敬が平戸的山大島神ノ浦から庶子の桜井秀蔵に宛てた書状には、山田綱次郎に依頼した出雲などの国絵図を中川飛騨守より借りて書き写して貰い、5月中に豊後小倉に送ってもらいたいとある。中川飛騨守忠英という勘定奉行から大目付に栄進した人物が介在している。長澤孝三の『幕府のふみくら』によると、国絵図には将軍の権威の象徴である紅葉山文庫所蔵のものと、より実用的な勘定所所蔵のものがあるという。忠敬が所持したのは勘定所系の写図ということになるのであろう。ただし、中川飛騨守を通して国絵図の実物を借用したのか、中川飛騨守が所持する写図を借りたのかは不明である。というのは、幕臣の間で国絵図の写しが貸借されていたようである。忠敬の嫡孫忠誨の文政4年11月4日の日記には、「水野様中屋敷、田口惣右衛門方へ廻り、書状並ニ仙台領ノ図、豊前国図、対馬国図差出シ、全図十枚、惣右衛門へ遣ス。」とあり、唐津藩主の寺社奉行水野忠邦の家臣の田口惣右衛門に国絵図写図を貸し出しており、関係する書状が三通残っている。

武士階級以外にも国絵図の写しが貸借されているケースがある。文化11年7月3日の『江戸日記』には「高山本陣鍵屋与作より書状届く。国絵図返却」とあり、「駿・遠・三州の国図御返却を落掌」という忠敬の返書も残っている。佐原時代の忠敬もまた下総と上総の国絵図の写しを所持している。寛政5年の勘定所役人の房総三国の「地理糺絵図御出役」の際に何らかの方法で入手したようである。